

## つたえたい心

今回は、県内のある中学生の人権作文の一部を紹介します。

ある夜のことです。私と母と姉と三人が居間でテレビを見ていると、玄関の戸がガタガタと鳴りました。時計を見ると10時前です。風が強い訳でもないのにと思いながら、みんなて恐る恐る外をのぞいてみると、近所のおばあさんでした。ぼつんと一人、押し車に腰をかけていました。とてもびっくりしました。知っている顔でしたが、やはり時間が時間だけにびっくりしました。

母はゆっくりと「こんばんは。おばさん、どうやった。一人か。」と声をかけました。おばあさんはにっこりと少し恥ずかしそうにいろいろと話し始めました。(中略)

話の中で私の祖母のことが出てきたので母は、おばあさんを待たせ、祖母を呼びに離れに行きました。(中略)

そして、母はおばあさんの家へ電話をして迎えを頼みました。おじさんとおばさんが来て、祖母や母に謝り「よそさんに迷惑かけたらあかんやろ。」とおばあさんに言いました。(中略)

母は「うちは構いません。いつでも来てください。」と言いました。(中略)

次の日、父も交えてこの話題になりました。父は「うちでいいんや。嫌な所やったらおばさんも行かへん。きっとおばさんにとってうちはいい所やで来たんや。うれしいことや。」と言いました。そして、「昔、お父さんはあのあばさんと、おっちゃんによくしてもらったんや。あそこの子と同じように、どこへ行くにも一緒に連れていってもらった。」となつかしように続けました。普段めったに説教染みたことを言わない父の口からこんなせりふが出ると妙に説得力があり、びっくりします。でも父の優しさがにじみ出た言葉だと思いました。すごくうれしかったです。(中略)

みんなで話した結果、介護しているお家の方が一番大変だということ、おばあさんもなりたくてなったのではないということ、これから先、おそらくほとんどの人が介護をする立場や、してもらう立場を経験することになるだろうということになりました。(中略)

今回、一つの出来事をきっかけに家族でいろいろ話し合えたことが、とてもよかったです。これからも、こんな風に何でも話し合える家族でありたいなと思います。

この話の中で、中学生の子どもが父に共感し、うれしく思ったのは、父の言葉に「人を大切にすぬくもり」を感じたからではないでしょうか。

日々、身近な生活の中で起こる一つひとつの出来事に対して、私たち大人がどのように考えるのか、また、どのように受けとめ行動するのかは、子どもに大きな影響を与えます。この作文を通して、今一度自分自身を振り返り、子どもに何を伝えていきたいのかを問い直したいものです。